

うみとろ(ぞく)

もっと知ってスマスイ

Suma
Aqualife Park
in KOBE

2019
12

December

特集

SPECIAL ISSUE

映画

「スマスイ」 にはせる思い

トピックス

ガラスの向こう側
カピバラ飼育員奮闘記
～意外と知られていない?カピバラの秘密編～

スマスイ生物図鑑 part39

研究の窓

特別企画「きみのカメは鳴いている?」の成果報告
きみのカメは鳴いていた!!

出張見聞録

国際淡水ガメ・陸ガメシンポジウム(米国・ツーソン)

スマスイ職員名鑑

映画

「スマスイ」 にはせる思い

特集
SPECIAL ISSUE

飼育教育部 部長
大鹿達弥



←↓メイキングの様子



↑エントランスでの撮影風景

“スマスイ”

「神戸市立須磨海浜水族園」を略し、愛称としてやっと浸透してきて、皆さまからそう呼んでいただけるようになりました。自然に呼ばれるようになったわけではなく、長い正式名を短くし、親しみを持ってもらおうと、当園の職員が定着するまでの数年間、言い続けた結果です。今では逆に“須磨海浜水族園”と呼んでいただけることはなく、職員を含め皆さまに“スマスイ”と呼んでいただいています(唯一、そこそこご年配の方々は、いまだ“須磨水族館”がほとんどですが…)

“スマスイ”を映像に残そう

そのスマスイで、映画を撮ることが決まったのが昨年末。なぜか?

実は、一つのキーワードがあります。それは「建て替え」。現スマスイも、1987年に前身の須磨水族館から建て替わり、はや33年が経過しようとしています。今日まで、良き展示をお客さまにご覧いただけるよう頑張ってきましたが、老朽化

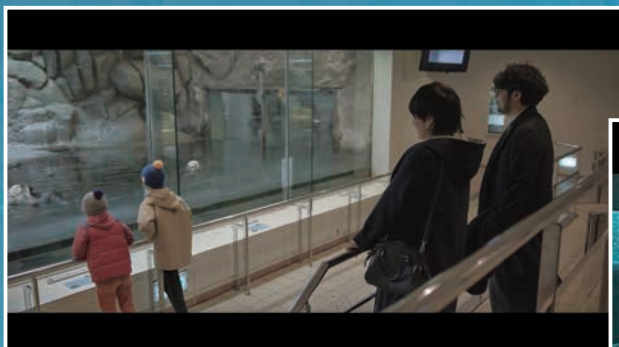
には勝てず、2024年をめどに新しく建て替わることが決まりました。さらに、ひょっとすると来年ぐらいから工事の影響が出てくるやもしれず、「現スマスイ」の原形が残っているのは今年いっぱいかもしれないとの情報が入ってきたのが昨年末だったのです。そこで、私を含めスマスイに並々ならぬ愛情を示している職員の行き着いた考えが、現スマスイを映像に残すということでした。というのも、時代背景があったとはいえ、前身の須磨水族館の映像は何も残っておらず、歴史や文化を振り返りたくてもできなかったもどかしさを教訓として生かしたかったのです。

映画「スマスイ」撮影へ

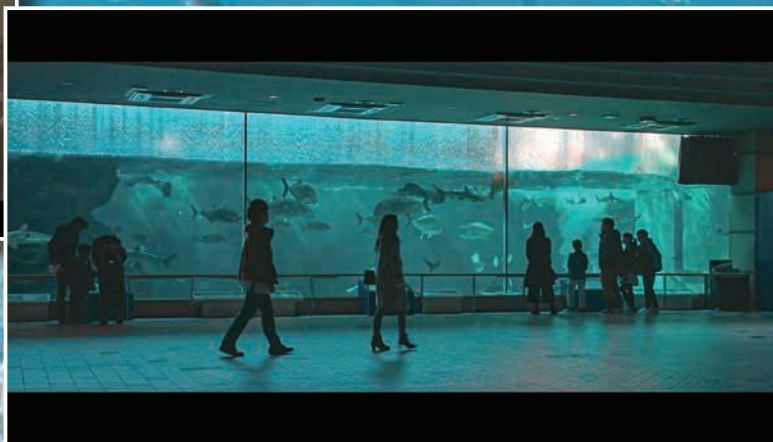
ちょうど2年ほど前に、神戸の映画好きのメンバーが集まって「大災獣ニゲロン」という防災啓発映画を撮りました。私もそのメンバーの一人だったため、「現在のスマスイの建物や生物を映像に残したいんだけど…」と、メンバーにお願いしました。しかし答えは意外にも「NO」。そのような映像を撮って残しても、ライブラリーの片隅にほこりをかぶって眠るDVDにし



←↓映画のシーン



↑→映画のシーン



かならないのではないかと懸念からでした。単なる記録映像では、皆さまにお披露目する機会もないでしょう。そこで飛び出したのが「スマスイを舞台にしっかりとした重厚な映画を撮ろう!」という案でした。そこからはトントン拍子に話が進み、神戸に関連する各企業や個人が集まって撮影することになりました。プロの脚本家、監督、役者、音楽家と神戸にはいるものです。さらには、本格的な映像機器をそろえる会社、IT企業、マスメディアが集結。大人が本気で遊ぶとこうなるのだと見せつけられつつ、映画「スマスイ」の撮影が始まりました。

映画「スマスイ」完成

今年の2月から撮影が始まり、約2カ月の撮影期間と約4カ月の編集期間を経て完成しました。完成後は夏休み期間中に当園で上映し、その後、神戸の映画館であるOSシネマズ神戸ハーバーランドでの上映も叶い、大変多くの方々に観賞していただきました。想像していた以上にヒューマンドラマとしての完成度が高く驚きましたが、スマスイのありとあらゆる場所で撮影してもらい、また飼育生物や職員も多数出演させてい

ただいたおかげで、現在のスマスイを映画として残すことができたと思います。

2024年の建て替え後はこれまでのスマスイとは異なり、シャチャイルカのショーをメインとした水族館へと様変わりすることが決まりました。「KOBE SUMA SEAWORLD(仮)」と名前も変わるようです。この映画の中で、「スマスイ」という名を残せたことは非常にうれしいことです。この映画を後世に残すことで、これまでスマスイを愛していただいた皆さまへ少しばかりの恩返しができるかなと思っています。

最後に、今回の映画の完成に尽力いただいた映画制作スタッフの方々に、職員一同、感謝申し上げます。そして何より、スマスイを愛し、来園いただく皆さまがいなければ、制作意欲が湧かなかったのも事実です。スマスイに関係していただいた全ての皆さまに心から感謝申し上げます。

■スマスイ製作委員会
須磨海浜水族園、ラジオ関西、ヒョウゴベンダ、劇団赤鬼、神戸デジタルラボ、KOBE鉄人PROJECT
■原案・製作統括：岡田誠司、監督・編集：岡 誠、監督・脚本：川浪ナミヲ

TOPICS

1
TOPIC

ニホンイシガメ 保全プロジェクトが始動

開始日=7月1日～

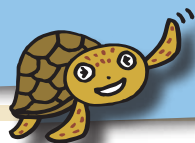
神戸版レッドデータ(2015)においてBランクに指定されるニホンイシガメを、生息域内外で連携して保全する取り組みを開始しました。園内の飼育設備の充実に加え、神戸市北区のあいな里山公園と連携し、公園内の生息状況調査などを

実施しています。今後は、調査結果を基に保全における課題を明らかにし、環境整備や個体群管理などに取り組む予定です。



↑あいな里山公園での生息数調査

調査にて捕獲されたニホンイシガメ



トピックス

2
TOPIC

企画展 「川へ遊びに行こう!!」を開催

開催期間=7月6日～9月1日

夏休みにぴったりな川遊びをテーマに企画展を開催しました。どのような場所にどんな生きものがあるのかわかりやすく紹介するため、飼育員が実際に神戸市内の川で採集し、生息域(上流、中流、下流)ごとに分けて展示しました。川遊びの注意点や採集に必要な道具も紹介することで、川での遊び方や楽しさを知っていただけの展示となりました。



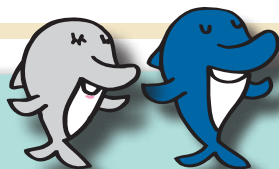
↑企画展「川へ遊びに行こう!!」全体像



↑サワガニのエサを狙うタカハヤ(上流水槽)



↑狭い所で落ち着くニホンウナギ(下流水槽)



3
TOPIC

夏季イベント 「SUMASUI NIGHT AQUARIUM『IRODORI×ART』」を開催

開催期間=7月13日～9月1日

今年の夏のテーマは「イロドリ×アート」。既存のアート作品に加えて、マダコの水槽を使った現代アート作品やおもしろ作品などを展示し、色鮮やかな芸術鑑賞を楽しんでいただきました。また、エントランスホールでの「彩り金魚」や夏限定の「イルカナイトライブ」「光の切り絵」のほか、初の本館外壁を活用したプロジェクションマッピングなど、夕方から夜

にかけての魅力も充実。さらに、お弁当広場での「巨大昆虫」や特別展示室での「恐竜館」の展示も、お子さまをはじめお客さまに大好評でした。園内にはカラフルな風車やフラッグなどの装飾も散りばめられ、来園いただいた皆さまの楽しい夏のひとときに「イロドリ」を添えました。



↑イルカナイトライブ「彩の宵」



←現代アート「KoiのRock'nRoller」



↑マダコ水槽を使った現代アート



4 TOPIC

企画展 「海がたいへん。水族園も注目、 プラスチックの行方」を開催

開催期間=7月15日～9月1日 ※期間延長中

海洋プラスチック問題は、海から恵みを受けている私たちにとって生活に密接に関わる問題であり、地球規模の大問題です。須磨海岸での調査結果や海洋生物の危機に関する最新

↓企画展会場



知見などを紹介し、ごみになったプラスチックが「どのように変化し、どこへ行くのか」を通して未来を考えさせられる展示に、多くの意見を頂きました。

↓台風後の砂浜とプラスチックごみ



↑海岸清掃後も残るマイクロプラスチック(もっと小さく細分化していく)



5 TOPIC

スマスイ初!ペンギンの換羽についての 企画展&特別スクールを開催

開催期間=企画展「ペンギンたちの衣替え!換羽って何!？」

7月20日～9月1日

特別スクール「ペンギンの羽の秘密を探ってみよう」
8月19日

1年に一度全身の羽が抜け換わる換羽について、パネルや本物の羽に触れるコーナーを設置して、詳しく解説しました。羽が抜けていく途中で、普段とは異なる全身ボサボサの姿を見たお客さまからは「こんな姿になるの!？」などと驚きの声が上がリ、換羽に関心を寄せていただくことができました。



↑換羽中のペンギン



↑特別スクールではペンギンの羽について観察や実験を行いました



↑企画展の様子



6 TOPIC

生きものスクール 「イルカの獣医繁殖学実習」を開催

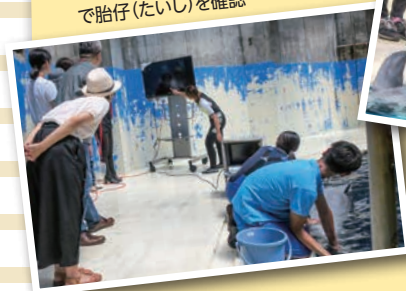
開催日=7月26日

私たちと同じ哺乳類であるバンドウイルカの繁殖学に触れていただこうと、少しアダルト向けのスクールを企画しました。当園のイルカ繁殖の歴史の紹介、人工授精の解説、精液検査の実習に加え、オスとメスそれぞれの生殖孔付近を触る体験、妊娠中のイルカのエコー検査の見学など盛りだくさんの内容に、参加者は静かに興奮していました。



↑バンドウイルカの精子

↓「ここが心臓ですよ」とエコー検査で胎仔(たいし)を確認



↑真剣にイルカの生殖孔付近を触るお客さま



7 TOPIC

企画展 「みんなでスクラム!勝手にラグビー的な 生きものたち」を開催

展示期間=9月14日～11月2日

今年、盛り上がりを見せたラグビーにあやかって、当園でも企画展を開催しました。日本のユニフォームにちなんだ魚や闘魚と呼ばれるベタ(ラグビーは漢字で闘球)を展示しました。試合の勝敗予想イベントも行い、カコとヤドカリがボール(餌)を取り合う様子はラグビーさながら、多くの方に楽しんでいただきました。



↑桜のエンブレムにちなんだサクラダイ(左)と赤白ストライプのニジエビス(右)



↑カコとヤドカリがボールに一直線!



←オス同士が激しく闘争するベタ

ガラスの向こう側

スマスイ職員がさまざまな切り口から現場の裏側について紹介します。

カピバラ飼育員奮闘記

～意外と知られていない？カピバラの秘密編～

今回は、カピバラ飼育の裏側を紹介するシリーズ第3弾をお届けします。皆さんは、カピバラの秘密を知っていますか？



↓鼻と目と耳がほぼ一直線に並ぶ



1 泳ぎが得意!

南米に生息するカピバラは、ジャガーなどの天敵に襲われた際に水中へ逃げ込むため、泳ぐのに適した体のつくりをしています。足には水かきがあり、顔を

横から見ると、鼻、目、耳が顔の上部にほぼ直線に並んでいます。これは水面から顔を上げた時に呼吸をしながら周りの様子をうかがうためです。また、鼻

と耳を閉じて水が入るのを防ぎ、5分程度水の中に潜ることも可能です。当園の「マーク」と「ローラ」も驚くと警戒して、水から上がってこないことがあります。カピバラにとって水の中は安心できる環境のようです。

カピバラの前歯↓

飼育員が歯をチェックする様子→

2 歯が命!

歯は、餌を食べる時や敵に襲われて反撃する時に使うため、カピバラにとってなくてはならないものです。生え変わることはなく、一生伸び続けますが、伸びすぎると噛み合わせが悪くなり、食欲が落ちて病気の原因になります。そのため歯のケアはとても大切です。当園



では週に一度、歯が伸びすぎているか、噛み合わせが悪くないかを飼育員がチェックしています。草

食性のカピバラは、野生では水草などを主食としていますが、当園ではイネ科の牧草やサツマイモ、ニンジンを与えています。イネ科の牧草は繊維質でなかなか噛み切ることができないので、よく噛ん



で食べるため、歯が磨耗し、伸びすぎるのを防ぎます。マークとローラの食事を見ると、顎をずっと動かしながら噛んで食べています。人間もカピバラもよく噛んで食事をするのは、健康のために大切なことなのです。

3 かじるのは餌だけじゃない!?

飼育エリアのプールには、ぼろぼろになった木が浮いていることがあります。よく見ると、周りの柵も削れ



かじられた柵→



←柵の修理

ています。これらは全てマークとローラがかじったものです。歯が伸びすぎないように、餌以外の物もかじるのです。し

かも、その量は相当なものです。飼育員が新しい木を入れたり、柵をつくり直したりしますが、直した次の日にはもうきれいな歯形が残されていることもしばしばあります。歯の健康を保つために、たくさんのお木を用意するのも飼育員の重要な仕事です。

カピバラシリーズ第3弾はいかがでしたでしょうか。実際に泳ぐ姿や食事風景を見に来てください。カピバラたちと共に皆さんをお待ちしております!

ムラソイ

Sebastes pachycephalus

海水魚

北海道を除く日本各地;北西太平洋域,朝鮮半島南部,黄海沿岸,渤海沿岸。

沿岸の岩礁域に生息し、全長は最大約40cmになる。小型の魚や甲殻類を餌とし、普段は岩陰などに身を潜めているが、餌が近づくと飛び付いて捕食する。胎生魚で、春季に生まれる仔魚は全長約6mmとメバル属(*Sebastes*)の中でも大きい。そのため、仔魚の初期餌料として用意が簡単な小型の甲殻類、アルテミアを与えて飼育することができ、本種の育成は比較的容易である。市場ではメジャー種であるカサゴと混同して販売されることもあり、両種の見分け方として、カサゴは胸びれがひし形に近いが、ムラソイは丸い形をしている点などがある。【野路晃秀】



ヒラメ

Paralichthys olivaceus

海水魚

日本各地沿岸(沖縄県を除く);オホーツク海南部沿岸,朝鮮半島全沿岸~南シナ海北部沿岸。

水深約200mまでの砂泥底に生息し、全長は最大103cmの記録がある。普段は砂の中に身を隠しているが、獲物となる魚が近づくと大きな口を広げて一瞬のうちに吸い込み、両顎に並んだ一列の鋭い歯でがっちり離さず捕食する。孵化直後の仔魚の目は普通の魚と同じように左右にあるが、成長に伴い右目が頭部上方に移動し、全長13mm程度の稚魚では完全に右目は左側に移動しており、その後、変態が完了する。当園が面している大阪湾でもよく漁獲されており、2019年6月に須磨海づり公園(2019年10月現在臨時休園中)から寄贈された全長約80cmの個体を展示している。【森唯友】



ズワイガニ

Chionoecetes opilio

無脊椎

北海道オホーツク海沿岸,茨城県以北の太平洋沿岸,山口県以北の日本海沿岸,朝鮮半島東海岸,カムチャッカ半島~ペーリング海,アリューシャン列島,アラスカ湾,大西洋北西部,バレンツ海。

水深50~600mの砂泥底に生息し、甲殻類や貝類などの底生動物のほか、海底に沈んだ魚類の死骸など何でも食べるが、大食漢というわけではなく、飼育下でもあまり餌を食べている姿を見掛けない。メスは初産を迎えた後は脱皮をしなくなるため、甲羅の幅が8cm程度で成長が止まるが、オスは成熟後も脱皮を行い、最終的に甲羅の幅が15cm程度まで成長する。水産上の重要種であり、国内の各産地では鮮度と品質の良さを明確にしてブランド化するため、オスは松葉ガニ、越前ガニ、加能ガニ、メスはセイコガニ、香箱ガニなどの流通名が産地ごとに存在している。【奥村悟】



ゴクラクハゼ

Rhinogobius similis

淡水魚

茨城県・秋田県以南の本州,九州,琉球列島,朝鮮半島南部,台湾。

体長7cmほどのハゼの仲間で、河川下流の淡水域から汽水域の砂礫底に見られる。雑食性で水生昆虫、小型の魚類、甲殻類を好むが、付着藻類も食べる。産卵期は7~10月で、体表やひれが婚姻色で鮮やかになったオスは、砂に半分埋もれた下面が平らな石の下に巣穴を掘り、メスを呼び込む。ペアとなったメスは巣穴の天井部分に産卵し、オスは孵化するまで卵の保護を行う。ハゼの仲間の多くは産卵場所や生息場所などの縄張りをめぐって同種同士で争うが、飼育下では、同じハゼ科のチチブと同居させた際にも闘争の様子が見られた。【田村雄二】



セマルハコガメ

Cuora flavomarginata

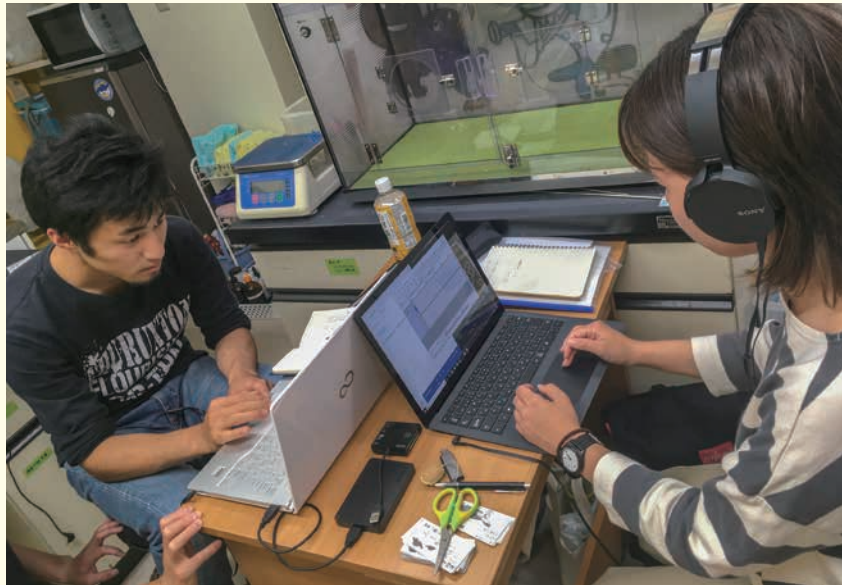
爬虫類

石垣島,西表島,(以下本邦は人為分布)沖縄島,宮古島,黒島,久米島;中国南部,台湾。

腹甲の真ん中に蝶番があり、身の危険を感じると頭部、四肢、尾を引っ込め、腹甲を折り曲げることで、ふたのように甲羅を隙間なく閉め、身を守る。その姿が箱のようであることと、背甲が高く丸いことが和名の由来となっている。日本の人為的に持ち込まれた地域では定着しており、沖縄島では在来種であるリュウキュウヤマガメとの交雑種が確認されるなど、国内外来種として問題視されている一方で、石垣島、西表島に分布するものはヤヤマセマルハコガメという固有亜種であり、国の天然記念物に指定され、保護されている。【宮地麻美】



特別企画

「きみのカメは鳴いている?」の成果報告
きみのカメは鳴いていた!!

↑ 録音データを聞き、音声の周波数や動画を見ながら、カメの鳴き声の有無を確認する様子

企画の趣旨

南米アマゾンに生息するオオヨコクビガメは、孵化したての子ガメが鳴いて母親を呼ぶなど、鳴くことによってコミュニケーションを取るということがわかってきました。生活のほとんどの時間を単独で過ごし、他個体との関係性が薄く、社会性が低い動物と認識されてきたカメがコミュニケーションを取っていたとは驚きです。加えて、カメと同じように声帯のない鳥は鳴管を使って鳴くことが知られていますが、カメについては鳴くという認識すら私たちは持ち合わせていませんでした。そんなカメの音声コミュニケーションに関する研究は発展途上で、どのような種類のカメがどのような声で鳴き、その鳴き声にどのような意味があるのかなど、疑問は尽きません。特に、水中で生活する淡水ガメや、日本を含むアジアに生息するカメでは研究が進んでいません。

そこで、どのような種類のカメが鳴いているのか録音して確かめようと、今回の特別企画「きみのカメは鳴いている?」を実施

しました。市民の皆さんが飼育しているカメを須磨海浜水族園に持ってきてもらい、鳴き声を録音してみるという、来園者参加型の研究です。そうすることで、いろいろな種類のカメを調べられるのではないかと、より多くの方にカメに興味を持っていただけるのではないかと期待を込めた、スマスイの新たな挑戦です。

どう録音したか?

企画段階では持ち込まれるカメの種類や大きさもわかりませんし、カメの音声確認も初めてのことであったので試行錯誤の連続でした。また、私たちスタッフの「本当にカメは鳴くのだろうか」という強い先入観も大きなハードルとなりました。このような状況の中、2019年6月8日から30日までの土・日曜の8日間、1日4件限定の完全予約制で募集をしました。

使用する機材は、周波数20Hz～200kHzの音を記録することができる録音機器と、空中と水中の音をそれぞれ拾う2種類のマイクを準備しました。これらを用い

て、預かったカメを、縦50cm、横100cm、高さ50cmのプラスチックケースに基本1匹ずつ入れて、30分間録音を試みました。水域で生活する水生のカメの場合は、カメの甲羅が全て沈む程度の深さまでケースに水を張りました。水域と陸域の両方で生活する半水生のカメや、陸域で生活する陸生のカメの場合は、ケースの底にミズゴケや布などを敷きました。預かったカメが鳴くのかどうかということさえまだわからない状態でしたので、雑音を鳴き声と判断してしまわないよう、カメがケースに手足をこすりつけるなどの音が発生しないよう工夫をし、野外の音が入り込みにくい園内動物病院のレントゲン室で録音を行いました。同時に、録音中の動画撮影も実施しました。録音が終わったら、次は録音データの確認です。再生速度を変えたり、動画を見たりしながら、何度も何度も繰り返し録音データを聞いて確認するので、気が遠くなるほどの時間がかかりました。

録音を試みたカメ

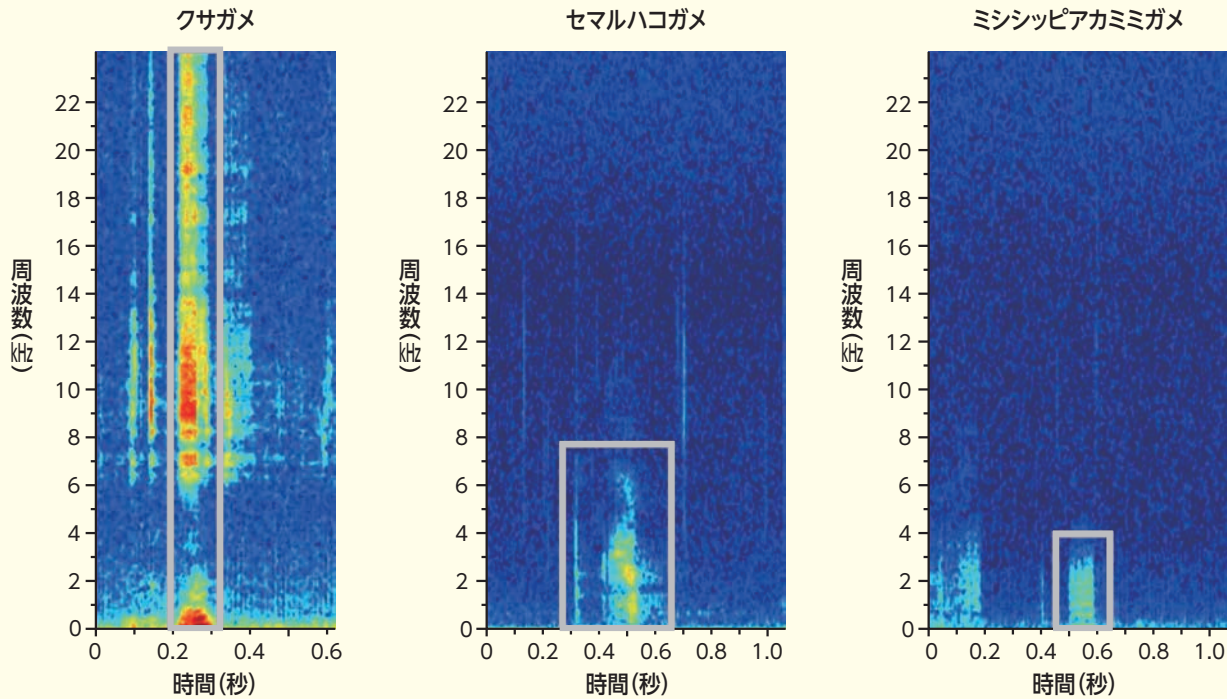
今回の企画では、関西や四国を中心に最も遠方は東京から、19人のカメの飼育者が計21個体のカメを提供してくれました。結果、5種類(水生3種、半水生1種、陸生1種)のカメが集まり、個体数の多かった種はクサガメ(水生)11匹で、次いでミシシippアカミミガメ(水生)6匹、セマルハコガメ(半水生)2匹、ニホンイシガメ(水生)とギリシャリクガメ(陸生)はそれぞれ1匹ずつでした。

きみのカメは鳴いていた!?

録音の結果、個体数の少なかったニホンイシガメ、ギリシャリクガメ以外のカメからは鳴いているであろう音を確認することができました。

最もはっきりとした音は、クサガメ(甲羅の大きさ16.7cmのオス)から確認できました。人間のおならのような「プツ」という

録音された鳴き声の周波数を示した図



↑録音作業の様子(左:クサガメ、右:セマルハコガメ)

広範囲の周波数を含む音で、聞いた瞬間に思わずニヤツしてしまうような音です。30分の録音時間に複数回確認できました。この音が発生している際の動画を見ると、クサガメのどが動いていることが確認できたため、咽頭部のどこかを動かして音を出している、つまり鳴いていることが確認できました。11匹のクサガメのうち、似たような「おなら音」が確認できた個体は6匹でした。

次に音を明瞭に確認できたのが、セマルハコガメ(2匹、いずれもメス)です。「ミヤマミヤ」という人間に例えると歯ざしりのような、高い音を確認することができました。

1匹単独と2匹同時に同じケースに入れた場合の2通りで録音をしたのですが、興味深かったのは、1匹単独の時にはこの音は確認されませんでした。2匹同時に録音した際に確認できたことです。「ミヤマミヤ」と音を発する際の動画を見ると、発生時に口を開けており、1匹がもう1匹に向かって、干渉しながら発しているように見受けられ、セマルハコガメの鳴き声であることがわかりました。この音を発して鳴く様子は、30分の録画で複数回、連続的に確認されました。

最後に、6匹のミシシippアカミミガメのうち、4匹から非常に小さな「ブツ」という、

クサガメと似ていますが、クサガメとは異なる低い周波数の音が確認されました。どの音も音量は小さいですが、再生速度を遅くして聞くと雑音ではなく、また30分の録音中に複数回確認されたことから、ミシシippアカミミガメが発している音であるとわかりました。

次なる展開は？

カメの音声コミュニケーションの研究においては、単純に口から音を発する鳴き声の有無を確認するだけでなく、その鳴き声の意味を考えることが重要です。今回の企画では、カメが鳴く意味についてまで考察することはできませんでしたが、少なくともクサガメとセマルハコガメ、ミシシippアカミミガメは鳴き声を発していることがわかりました。これは、音声コミュニケーションの研究が未着手の、クサガメやセマルハコガメのようなアジアのカメにとっては、とても大きな発見です。今後は、今回得られた録音データを動画とともにより詳細に分析していきたいと考えています。

また、今回の企画に当たり多くの皆さまの協力のおかげで録音手法を習得することができました。今後はさらに、自然環境下や実験飼育下での録音を行い、日本を含めたアジアに生息するカメの音声コミュニケーションの研究を行っていききたいと思います。将来、カメと会話ができるかもしれません。

国際淡水ガメ・陸ガメシンポジウム (米国・ツーソン)



↑学会会場周辺のサバンナ

これまで何度も国際学会と称する会議に出席してきた。主にウミガメに関する会議なのだが、おかげさまでそこそこ楽しい思いをしてきた。何せウミガメが生息している所は、世界の海の中でも暖かくて美しいのである。フロリダ、ハワイ、バリ島、ブリスベン、ク

レタ島等、全てが美しく快適な会議だった。

50歳を過ぎて当園に来た頃から淡水ガメの問題に頭を突っ込むようになり、2018年からウミガメ以外のカメの学会にも参加するようになった。

2018年の国際淡水ガメ・陸ガメシンポジウムはケネディ大統領が撃たれたガラス、そして2019年はアリゾナ州にある砂漠の都市ツーソンで開催された。ウミガメは8種、それ以外のカメは340種以上もいるのに、参加者はウミガメの会議より少な



↑ホテルの道に出てきたドクトカゲ



↑原産地の米国でも日本と同じように日光浴をするミシシッピアカミミガメ

く、ざっと300人。発表の数も少なく全部で120件程度。ウミガメの学会は若い女性の研究者も多く、実に華やかであるのだが、淡水ガメはそこからは程遠い雰囲気なのである。しかも、日本人の参加者はわれわれのグループと、米国の国際NGOに勤務する女性が1人だけ。完全にアウェーな状況である。

ウミガメといえば絶滅危惧がキーワードになるが、淡水ガメ、陸ガメも同じで、話題の中心は保全となる。ただ、ウミガメの場合は絶滅といっても、海というベールに包まれてその実態が露骨にわかってこないのに比べ、淡水ガメや陸ガメの場合はかなり深刻で、実際に数個体しか生存していない種も多い。近年「ロンサム

ジョージ」と名付けられた個体が死んだことによって絶滅したピンタゾウガメの例もあることから、保全に対しても気合が入る。陸域のカメは生息地にアプローチしやすいことも、熱が入る理由の一つであろう。

そんな保全がメインの学会で行うわれわれの発表はつらい。ある大学院生はミシシッピアカミミガメが瀬戸内海の島々にまで広がって困るという研究内容、私は駆除したアカミミガメの胃内容物の分析結果について話したのだが、私の発表に至っては大切なカメを殺すなんてとんでもないという雰囲気が会場に漂っている。アウェー感はさらに高まるのである。

それにしても、日本の学会とは最も異なる点を懇親会で知らされる。私のテーブルには初老の夫婦が2組交じっていた。カメの研究者とその奥さまかと思っていたが、どうも違うらしい。しかも金持ちのようだ。何者かと尋ねてみると、予想もつかない答えが返ってきた。彼らはマダガスカルホウシャガメが好きで、その保護活動に寄付金を出しており、毎年、その活動がどう発展しているのを見に来るのが楽しみなのだそうだ。まあ、日本ではあり得ない光景である。あり得ない理由は日本の税制にあることは間違いない。政府ももう少し国民を信用して、税控除の範囲拡大や、控除限度額の引き上げなどして、ちょっと金の流れを自由にしてもよいのではないかと考えた出張であった。



↑自分が支援しているチームの発表を聞くサポーター

裏でカタカタ。苦手克服中!?



総務経理課
田村衣里

PROFILE

短大卒業後、一般企業へ就職。子どもの頃は泳ぐことが大好きで、水泳のインストラクターやイルカトレーナーに憧れていたことも…。現在は裏側でパソコンと電卓をたたく日々を過ごしています。

水 族館で働いている…そう聞くと多くの人は「飼育員?イルカトレーナー?」と思われるはず。私も友人に「スマスイで働いている」と言うと、同じ質問をされます。そんな時「残念ながら、普通の事務員」と答えます。

短大卒業後、一般企業で総務経理の仕事をして4年半して退職。そろそろ就職活動でしようかと思っていた頃、何気なく見ていた新聞の折り込みで入っていた求人広告に水族園での事務員募集の記事を発見!!魚の知識もなく、むしろ生きものが苦手と思っていた中、「なんか面白そうやな」と軽い気持ちで応募し、まさかの採用…。あの頃は、10年も勤めることになるとは思っていませんでした。

そんな私の仕事とはといいますと、前職と同じく総務経理の仕事をしています。日々の売り上げの集計や支払い、人事関係の書類の作成など、水族園の裏側でカタカタとパソコンや電卓をたたいています。

そして、総務経理の仕事以外に、本館2階にあるミュージアムショップCORALの管理もしています。日々の運営などは店長と店舗スタッフが行っており、私は売り上げ管理や、新商品の開発業務のお手伝いなどを行っています。例えば、飼育員監修の新商品をつくる際に、店舗スタッフと飼育員の間にに入り、実際の生きものに近いひれの位置や足の色など、飼育員のこだわりを店側に伝えたり、時には「この商品を入れたい!」という無理難題を店長に伝えたり…と、やはりお客さまには直接見えない仕事です。裏側で支えるという点は、総務経理の仕事と同じかもしれません。

さて、10年も働いていると、さすがに生きものへの興味が湧いてきます。苦手意識というのはなかなか変わりませんが、たまの楽しみは、支払いの際に魚を調べてみることです。請求書を見て「この魚ってこんな高いんや」と驚いたり、名前だけ見てもさっぱりわからない魚について調べて「こんな色の魚だったんだ」と感心したりしています。少しずつ苦手意識を克服しつつ、これからもお客さまには見えない裏側で仕事をしたいと思っています。



↑CORAL店舗

▶須磨ドルフィン
コーストプロジェクト
関連商品



◀ペンギンのおしりの穴
やイルカのひれの位置に
こだわった飼育員監修
のぬいぐるみ



↑60周年記念商品



亀崎博士の水族観

当園の学術研究統括である亀崎直樹が、園内のさまざまな水槽や生きものを見方を紹介・提案します。

アロワナの完璧な形態

ア マゾン館にはアロワナが泳いでいる。ところが、アロワナはアマゾン(南米)だけでなくオーストラリアにもいる。バラムンディと呼ぶが、姿形はアロワナだ。ここで思い起こしてほしいのは、2億年前の地球だ。大陸は2つに分かれており、その後、片方のゴンドワナ大陸がアフリカ、オーストラリア、南米、南極に、もう一方のローラシア大陸がユーラシアと北米になった。アロワナはゴンドワナで栄えた。そして、大陸が離れ離れになるとともにアロワナも離れ離れになり、オーストラリアと南米にすむこととなった。それにしても、両者の形はよく似ている。分かれても、形を進化させない。多分、変える余地のない完璧な形なのであろう。

